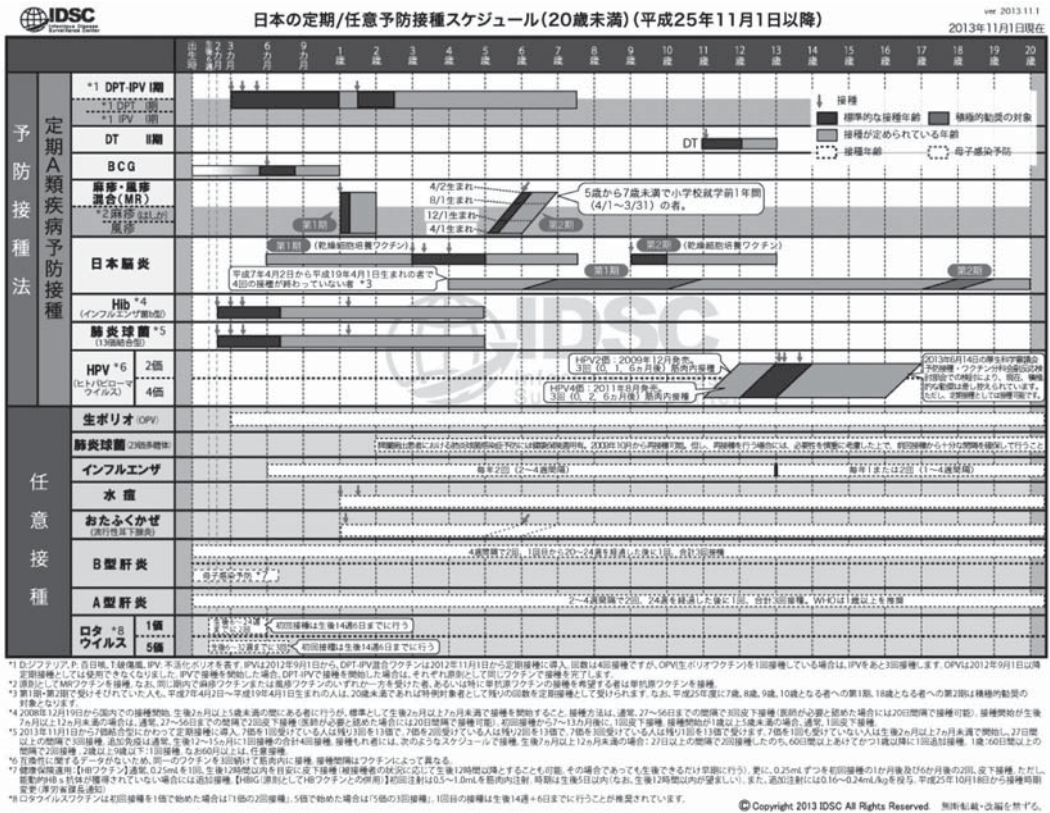


§ ワクチン関連トピックス

1. 沈降 13 価肺炎球菌結合型ワクチンが定期接種に導入

2013 年 11 月 1 日から、沈降 7 価肺炎球菌結合型ワクチン（無毒性変異ジフテリア毒素結合体）（以下、PCV7）にかわって、沈降 13 価肺炎球菌結合型ワクチン（無毒性変異ジフテリア毒素結合体）（以下、PCV13）が定期接種に導入されました。PCV7 は 11 月 1 日以降、定期接種に使用することはできなくなりました。

これまでに PCV7 の接種を受けていた場合は、残りの回数を PCV13 で接種することになります。なお、日本小児科学会は、PCV7 を既に 4 回接種完了した 6 歳未満の児に対して、4 回目の接種から 8 週間以上あけて PCV13 の追加接種を行うことを奨めています。ただしこの場合の接種は任意接種となります。



国立感染症研究所：予防接種情報のサイト <http://www.nih.go.jp/niid/ja/vaccine-j.html> に掲載

2. B 型肝炎母子感染予防の接種スケジュールが変更

公知申請が認められ、母子感染予防として接種する組換え沈降 B 型肝炎ワクチン（酵母由来）（以下、B 型肝炎ワクチン）と抗 HBs 人免疫グロブリン（以下、HBIG）の接種時期が変更になりました。2013 年 10 月 18 日から健康保険適用も可能です（厚生労働省保険局医療課長通知：平成 25 年 10 月 18 日付、保医発 2013 第 1 号）

※詳しくは、日本産婦人科医会ホームページ (<http://www.jaog.or.jp/>)、日本小児科学会ホームページ (<http://www.jpeds.or.jp/>) に掲載されています。

3. 風疹と先天性風疹症候群（congenital rubella syndrome: CRS）の発生動向、2013年

2008年から風疹は感染症法に基づく5類感染症全数把握疾患になり、風疹と診断した場合は全例、7日以内に最寄りの保健所への届出が義務づけられている。

2013年の風疹流行は関東地方から始まり、近畿・九州地方に広がり、その後全国に拡大した（図1）。2013年第1～47週の累積患者報告数は2013年11月27日現在14,279人で、2012年1年間の報告数（2,392人）の約6倍となった（図2）。報告患者の年齢は約9割が20歳以上で、男性が女性の約3倍であった（図3）。これまで定期的予防接種を受ける機会がなかった1979年4月1日以前に生まれた男性（34歳以上）に多く、学校での集団義務接種であった1962年4月2日～1979年4月1日生まれ（34歳以上51歳未満）の女性患者は少なかった。1962年4月1日以前に生まれた者（51歳以上）は男女ともに定期接種の機会がなかった。そのため、女性については40代より50代の患者報告数が多かった。1995年4月から中学生男女と生後12～90か月未満の男女が定期接種の対象になったが、医療機関での個別接種に変更されたため、1979年4月2日～1987年10月1日生まれ（25歳6か月以上34歳未満）の男女の接種率が特に低かった。1987年10月2日～1990年4月1日生まれ（23歳以上25歳6か月未満）の男女も、幼児期に定期接種の機会があったが、接種率は十分とは言えなかった。1990年4月2日以降に生まれた者（23歳未満）は、幼児期に加えて、第2期（小学校入学前1年間）、第3期（中1）、第4期（高3相当年齢）のいずれかで2回目の定期接種の機会をもつが、第4期に2回目の接種機会があった者は、第2期・第3期に接種機会があった者に比べて接種率が低かったため、1990年4月2日～1995年4月1日生まれの者（18歳以上23歳以下）の患者は、これより若い年齢の者より患者報告数は多かった（図4-1,4-2）。

男性の95%は接種歴不明または無し、女性も88%は接種歴不明または無しで、患者数が少なかった小児については、2回の定期接種の効果と考えられる。

一方CRSは、1999年第14週から全例の届出が義務付けられている。これまで2004年の10人が最も多く、その他の年は年間0～2人であったが、2012年～2013年の風疹流行により、2012年第42週～

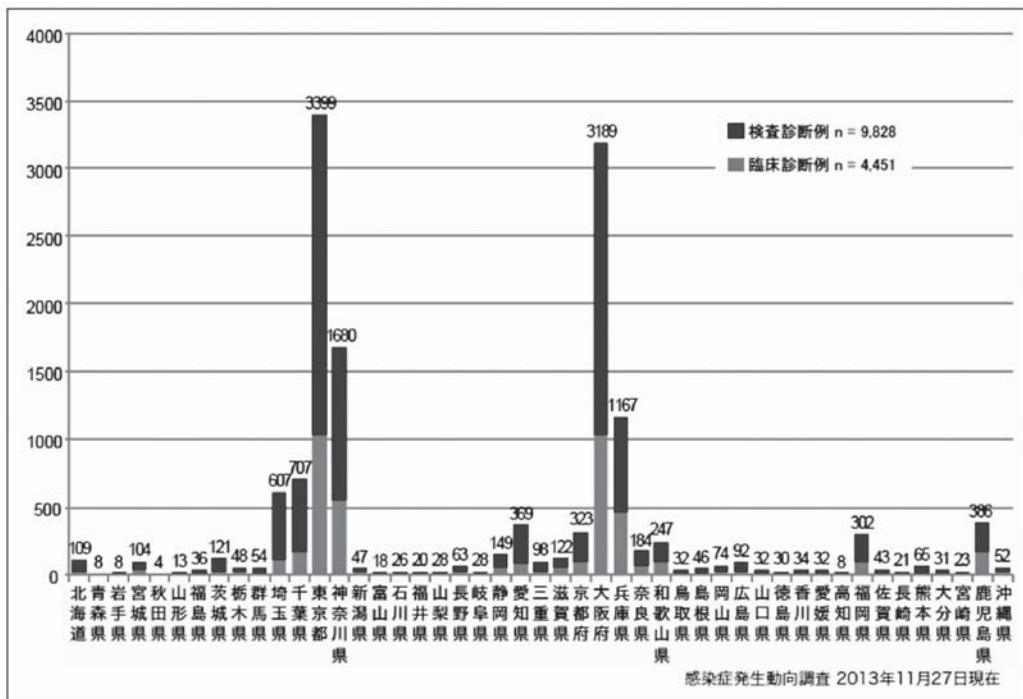


図1 都道府県別病型別風疹累積報告数 2013年第1～47週 (n=14,279)

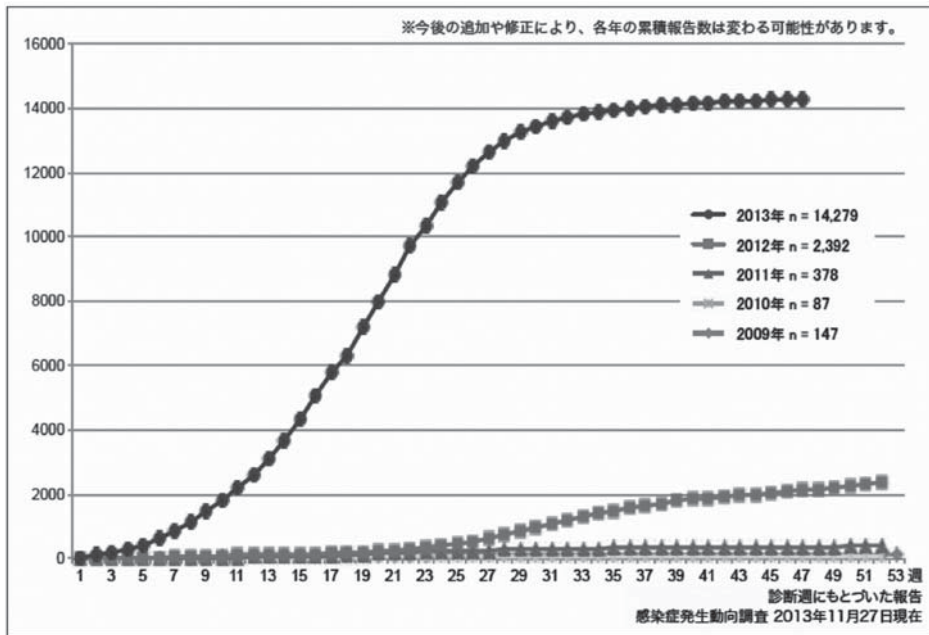


図2 風疹累積報告数の推移 2009～2013年（第1～47週）

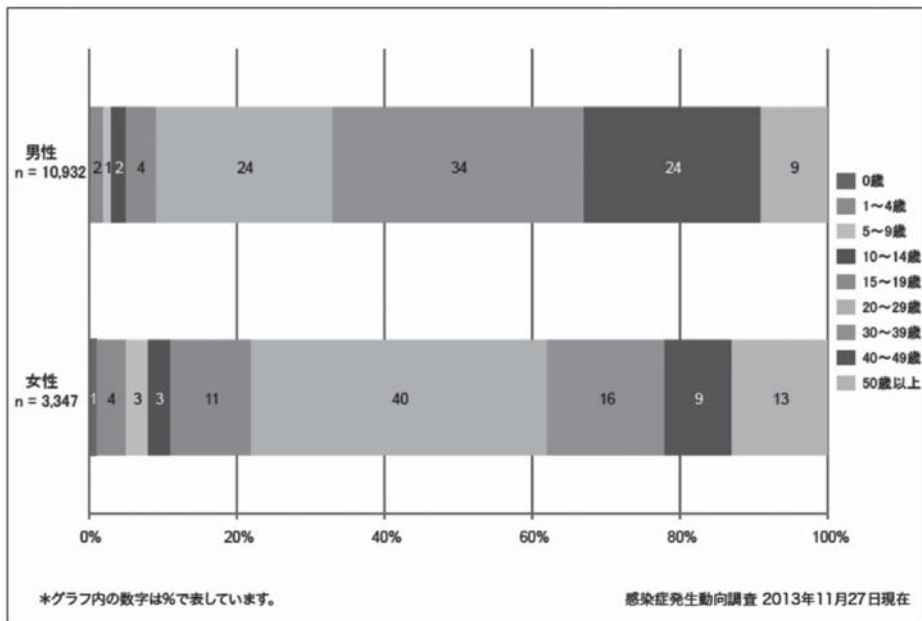


図3 年齢群別風疹累積報告数割合（男女別）2013年第1～47週（n=14,279）

2013年第47週までに29人のCRSが報告された。推定感染地域は、東京都が8人と最も多く、次いで大阪府6人、埼玉県4人、神奈川県3人であった。母親の妊娠中の風疹罹患歴はありが多かったが、不顕性感染で児がCRSを発症した者もいた。ワクチン接種歴は無あるいは不明が多かったが、1回ありの者が4人いた。

現在、厚生労働省では「風疹に関する特定感染症予防指針」の告示に向けた準備が進められている。

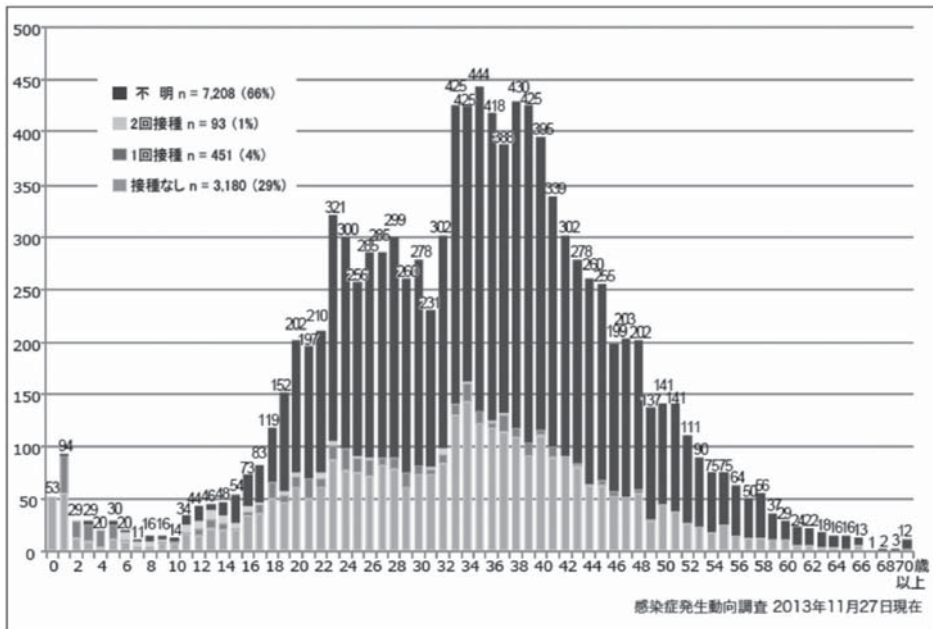


図 4-1 年齢群別接種歴別風疹累積報告数（男性）2013 年第 1～47 週（n=10,932）

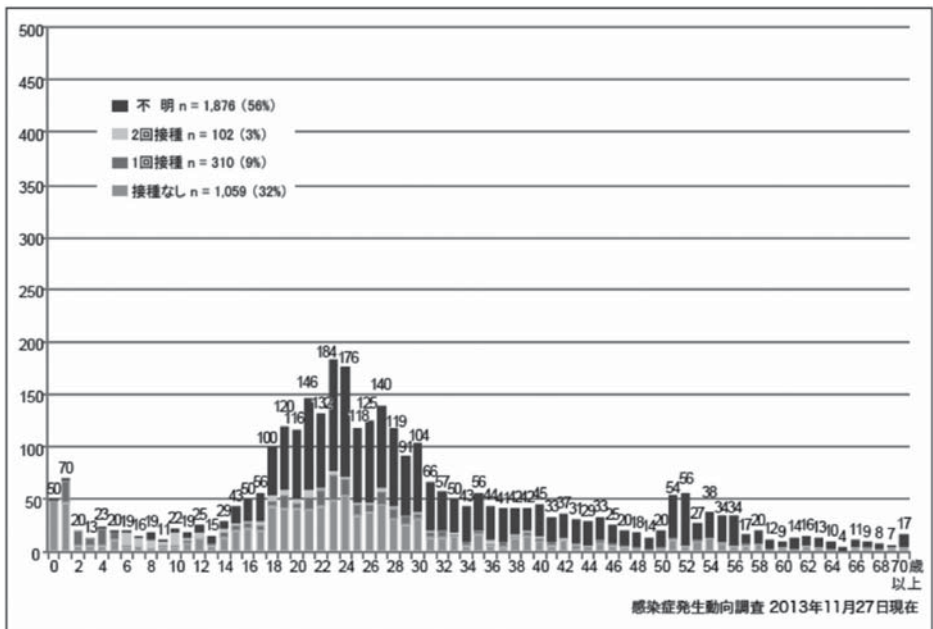


図 4-2 年齢群別接種歴別風疹累積報告数（女性）2013 年第 1～47 週（n=3,347）

もう二度と風疹の流行を国内で起こさないようにするためには、数百万人の単位で残存している成人の感受性者の蓄積をなくし、2回の定期接種の接種率がいずれも95%以上に維持することが重要である。女性は妊娠前に2回のワクチンを受け、妊婦の家族は、風疹ウイルスを家庭に持ち込まないように、あらかじめワクチンを受けて予防してほしい。自分がかからないでいることは、ひいては胎児を風疹から守り、社会全体を風疹の流行から守っていることを国民一人一人が理解して、予防に努めてほしい。